

文化・芸術

「婦人立像」

1906、07年、鉛筆、紙
30・3センチ×20・5センチ

藤島武二（1867～1943年）

壮年期をむかえ、ようやく欧州留学ができた藤島武二は、何を学んだのでしょうか。街で見えるものすべてが、画家を刺激し、画題になったのでしょう。この作品を見ると、街を行き交う人々の姿さえも、見知らぬ婦人に声を掛け、ちょっと立ち止まってもらい、すばやく描いたように感じられます。

しかし、もの珍しさだけではありません。画家の目と手は、それまでとは全くちがった動きをしています。面と線の意識が強くなり、明暗で表された姿は、そこにすくと立っています。この留学で藤島は、対象や空間のとらえ方が、それまでの装飾的なものから立体感を強く意識したものに変わったのです。

ただ、描かれた婦人の視線は、そうした画家の姿を見下ろしていません。婦人してみれば、エトランゼ、しかも東洋人の画家が、どのように自分を描くのか、そうした好奇心もあったのかもしれない。画家と描かれるママムの視線の交錯に、20世紀初頭の世界の複雑さを見てとることもできます。

（田中）



名画の扉

大川美術館特集展示「藤島武二スケッチ100」から